

# 2024年度 LCA国際小学校 学校自己評価

学校教育目標	重点目標（中・長期目標）	総合評価					
◆社会の一員として個性を生かして、社会に貢献できる人間の育成 ◆世界を舞台に活躍できる人間の育成 ◆生きることの素晴らしさを知った人間の育成	◆グローバルな視野をもち、自己肯定感、Well-beingが高い児童を育成するための教育のさらなる向上	外部機関によるTOEFLの成果の詳細な分析により、英語の新カリキュラム(2021より改訂)は軌道に乗りつつあり、グローバルな視野を持って世界で活躍するための英語教育の質は向上していることを確認した。 本物の文化体験として前期にはバレー、後期にはオペラ歌手を招いての公演を行った。また、地域連携の観点からは、北体育館の英語の館内放送をはじめ、全校での北の丘公園・北の丘センターまわりの落ち葉の清掃活動を開催することができた。校内研修についても外部リソースを取り入れ、計画的な研修を進めることができた。					
	今年度の重点目標	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
	子どもの個を尊重した教育と英語教育の質の向上	担任の先生となる外国人教諭が、自分が受け持つ児童の理解を進めることができるよう、Positive Discipline(社会性と情動の学習を促進するカリキュラム)の研修を取り入れ、児童理解の力を個々が高めること、児童理解に基づく授業づくりを1年間のテーマとして取り組んだ。その結果、各担任の学級経営力が向上し、英語の授業においても子ども一人ひとりに寄り添う姿勢がみられるようになった。	○				共通で継続的な研修の導入によって、全教員の目指すべき方向性を示しているが、運用面では個人によりばらつきが大きい。表面的な児童理解や学級経営に陥ることがないよう、継続した研修とフォローアップ、また教員同士の意見交換とフィードバックに基づく教材・教育活動の開発が次年度のテーマである。
	保護者とのコミュニケーションの充実と学校と家庭の協力体制の増進	校長兼学園長自らが保護者と少人数で懇談をする「学園長ナイト」の充実や前期・後期にそれぞれ学級懇談会の機会を設けるなど、直接のコミュニケーションの機会を増やすようにした。学園長と保護者との直接のコミュニケーションの中では、ランドセルやスクールグッズ、お道具箱の検討など、保護者と学校が一緒になって進めていくことができた。今後もプロジェクトごとに保護者の代表と連携していく体制をつくっていただけると考えている。	○				学校から大事なお知らせとLCAの教育観を伝える目的で、全保護者に出席もしくは視聴を必須としているEducational lectureのアンケートの回答率が低いと、その周知の仕方も工夫する必要がある。また、Educational lectureについてもオンラインで視聴した保護者の最終的な視聴の有無の確認ができていないので、そのあり方も検討の余地がある。

領域	対象	目 標	評価の観点	成果と課題	A	B	C	D	改善策・向上策
教 育 活 動	教育課程	特例校としての特色を生かした英語教育のさらなる充実。	英語の新カリキュラム(2021より改訂)に基づき、単元・プロジェクト計画をふくませて年間計画を各学年で立てることができたか。年間計画に評価項目を織り込み、単元・プロジェクトを運営できたか。	どの学年においても、オリジナル・カリキュラムに基づいた年間計画を効果的に利用することができるようになっており、学年によっては意欲的な教科横断型プロジェクトも見られるようになった。TOEFLのスコアについても年を追うごとにスコアが高まっていることが確認されており、児童の英語力を伸ばすカリキュラムが着実に成果を上げてきている。	○				どの学年でも、より意欲的な教科横断型プロジェクトが進められるよう、引き続き教員の単元計画力を養うトレーニングと、指導と評価の一体化についての話し合いは、1年間を通じて計画的に行う必要がある。
	教科指導	受験重視か英語重視かによって一昨年度より導入した算数の新システムを拡充する。昨年度の5年生に加え、6年生にも英語での算数指導を導入。また算数の副教材をアメリカで高い評価を受けているものに刷新。	英語算数の副教材の導入が、児童の授業への満足度、または算数力向上につながっていることが見て取れるか。英語とともに算数の力もきちんとつけられているか。教員にとっての指導の困難さが軽減されたか。	英語算数の副教材は、外国人教員にとってはわかりやすく教えやすいということで、授業は教師の知識・指導力によるばらつきが抑えられた結果、児童にとっても良いものになった学年がほとんどである。どのページもカラー印刷されているテキストは、児童には大変評判が良い。今年度が初めての導入だったので、今年は利用しながらカリキュラムを年間を通して作ってきた。来年度に向けて、今年の利用方法・進捗で良かったのか、カリキュラムの精査が必要である。	○				低学年では特に、基礎的な計算スキルなどについて、量的にも質的にも練習問題やドリルのような教材を、体系的にカリキュラムに位置付け、算数の基礎力を強化する必要がある。高学年では、英語算数は選択制となるが、英語理解力もかなり求められるので、英語算数を選択する児童の力を見極める作業が必要となる。
	児童支援	児童支援コーディネーターを置き、特別支援教育を専門とする外部機関との連携やスクールカウンセラーとの連携による児童支援のさらなる充実。	児童支援コーディネーターを中心とした児童支援体制がうまく機能したか。	昨年度に続き、児童支援コーディネーターが支援の必要な児童の情報を集約し、スクールカウンセラーやサポートティーチャーと連携しながら必要な支援を考え、対応することができた。今年度は外部機関とのさらなる連携によって、検査結果に応じた指導の充実やSSTなどのプログラムを校内でも用意できるよう、協議を進めてきたが、先方の都合もあり、見送るかたちとなった。	○				検査を受けた児童の検査結果に応じた指導の充実やSSTなどのプログラムについて、より充実した内容を準備できるよう、引き続き関係機関との連携や新規に関わりをもてそうな機関を模索していただけると考えている。
学 校 運 営	保護者との連携	担任・Japanese teachers(学年付き日本人教諭)を中心とした保護者との連携の充実に加え、スクールカウンセラーを含めた相談体制の充実。	担任・Japanese teachers(学年付き日本人教諭)を中心に保護者との連携の充実させることができたか。スクールカウンセラーと連携し、学校への相談体制の充実が図れたか。	前期・後期にそれぞれ学級懇談会の機会を設け、保護者と担任が直接コミュニケーションをとれる機会を増やした。保護者への発信手段として、ミマモメ配信は配信すべき内容のフォーマットを統一した。保護者掲示板は学校全体に関わること、Google Classroomは学年・クラスに関わることと区分けをきちんとした情報発信を行った。	○				学校からの情報発信がきちんと保護者に伝わっていないことがあるため、保護者掲示板の使い方の案内と徹底、ミマモメ配信やメールの活用方法など、保護者の声を参考しながら改善していく必要がある。
	地域との連携	相模原市教委と連携の上、風つ子展等、市内の学校と一緒に取り組めるイベントに参加する。また、他の教育機関と教育連携協定を結ぶなどして、地域での交流の機会を図る。	地域の人や市内の学校とのつながりをもてるような行事やイベントを実施できたか。	今年度は、新たに北の丘センターと連携し、全校で北の丘センター・北公園の清掃活動を実施することができた。縦割りでグループを組み、北の丘センターの職員の方々にも全面協力をいただくことで、地域貢献にもつながる勤労・奉仕行事の開催することができた。また、北体育館の館内放送の英語版を提供するなどの活動ができた。	○				北の丘センターの清掃活動や北体育館の館内放送については、今後も継続的に開催できるよう連携をしていきたい。一方、今年度は相原高校との交流ができなかったため、来年度は再開できるよう引き続き連絡を取り合い調整していきたい。
	研修	社内他部署(英語教育・教材の開発部署)、校内の有資格者による実践的な研修を行う。初任者に対する研修を複数体制で行い、実践的なアドバイスをしていく。	社内他部署(英語教育・教材の開発部署)、校内の有資格者による実践的な研修を行えたか。初任者に対する研修を複数体制で行い、実践的なアドバイスをしていくことができたか。	年度当初に、外国人教諭は全員、Positive Discipline(社会性と情動の学習を促進するカリキュラム)を受講した。児童理解の促進と、学級経営力を高める研修は非常に好評であり、研修で得た知識が様々な実践で活用された。外国人・日本人ともに、研修のフォローアップは年間を通じて、全体・個別・学年といった様々なレベルで行った。子どものことや、学級経営の課題について語るために共通言語が生まれ、教員同士での意見交換が活性化された。授業経営では、児童理解に基づく授業づくりをテーマに、お互いの授業を参観してフィードバックをする取り組みを継続的に行った。	○				研修で得られた成果を英語カリキュラムに織り込み、授業にもっと生かしてもらうための研修と、継続的な個別のフォローアップと学年ごとの方針策定による推進が必要である。